

臣の歌を出して、といふ歌のこゝろばへなりといへり、これしのぶのみだれとよめるは、しのぶすりの亂れといふ意也と、しらせたる也、かの紫の色こきときはといふ歌の次に、むさし野のこころなるべしといへるをもおもひ合すべし、もしまのぶ草のかたをすりたるをよめるならば、古今の歌を引出たるは、用なきいたづらごと也、又垣衣草のかたならんには、かの古今の歌、軒に生るなどこそよむべけれ、みちのくのとよめるは何のよしぞや、かの國に信夫郡といふがあれ、ばとて、さる遠き國の名をとり出で、よしもなき垣衣草の枕詞には、おくべき物かは、又みだる、よしをいはむに、しのお草はいとも似つかはしからず、かの草のさまは、さいふばかりみだれたる物にはあらず、それも摺たる形は亂れてもあるべけれど、すりたるにつけてみだれたらんは、いづれの物のかたにても同じことなるべし、いたく物よりことに亂れたる形ならではかなはず、又垣衣はとり分て摺染などにすべき物にもあらざるをや、さて又かの信夫郡より出といふことを破りて、布など染たるを、諸國より貢ることは古見えすといはれたるも、たがへり、延喜の大藏内藏などの式にも、諸國所貢染布の色々など見えたるをや、すり衣は、おのが家々にてこそ摺たれといはるれども、さりとて外より摺てい出すこともなかなからん、國々より出て名ある物を、めで用ふることは、今も昔も同じこと也、さて信夫郡に石の有しにて、すれりといふはいかゞ有けむ、されどまことに然なりけんもしりがたきをひたぶるに、偽言也とはいふべくもあらず、その石の事は、とまれかくまれ、信夫郡より出せりしことは、論なきをや、

〔新著聞集三勝蹟〕奥州信夫文字摺石

奥州信夫郡に信夫文字摺の石あり、福島より貳里ばかり行て、瀬の上といふ所の山の下の島にあり、此石の面を摺てみれば、死せる親族の形あらはるゝとて、人々あつまりて、田島の損亡多かりければ、今はその島の中に埋みをきし、